

戦前のハワイにおける日系仏教教団の諸相

守屋友江

Abstract

This paper examines pre-war Japanese Buddhist missions in Hawaii, particularly the Honpa Hongwanji Mission of Hawaii, and explores how the lay members helped found their own temples in the Nikkei community. As the immigrants started settling in Hawaii, they not only established such organizations as the *kenjinkai*, Japanese language schools, labor unions, etc., but also sought spiritual guidance from the Buddhist teachings. Early 20th century Hawaii, therefore, witnessed numerous Japanese Buddhist temples being built in the sugar plantations, although previous historical studies have paid little attention to the role of this religion apart from their pro-Japanese and nationalistic attitudes. In order to highlight marginality of the Hawaii mission, I will also elucidate the endeavors of the Buddhist foreign mission in East Asia that had strong ties with Japan's imperialist expansionism.

Keywords : Japanese Buddhist missions, Nikkei community, religious affiliation in southwest Japan, Honpa Hongwanji Mission of Hawaii

はじめに

本稿では、戦前のハワイ移民とともに海を渡った日系仏教教団について、研究史を再検討しながら、移民の出身地とその宗派的特性の関係を明らかにする。また、ハワイ本派本願寺教団を中心に、その宗派的特徴がどのようにハワイ日系移民の生活様式と関わっているかについて、他宗派と比較しながら検討してみたい。

まず戦後の研究史を振り返ると、下記の傾向を指摘できる。ハワイ日系移民社会における宗教を論じる際、キリスト教については同志社大学人文科学研究所の共同研究による蓄積があるが¹⁾、仏教についての研究はまだ多くはない。日系仏教を論じる際、アメリカの研究者の多くが浄土真宗本願寺派（ハワイではハワイ本派本願寺教団、以下本派本願寺）を研究対象とすることが多い²⁾。それは歴史的にみても、本派本願寺がハワイの日系仏教教団の中で最大規模であり、自ずと研究対象になりやすいためであろう。また日本における日系移民研究は、主に歴史学の手法によるが、同様に本派本願寺を取り上げることが多い³⁾。当時の一次史料で、「仏教」とは多くの場合に本派本願寺を指していたことや、日系移民史の重要な事件にその関係者がしばしば登場したという事情も影響していると思われる。

さらに、東京大学宗教学研究室の調査グループによるハワイ、カリフォルニアにおける包括

的な日系人宗教調査が行われる一方⁴⁾、各宗派による教団史編纂も進むようになつた⁵⁾。また宗教社会学・文化人類学の視点から、日系人の宗教に関する調査も報告されている⁶⁾。近代仏教史からみると、日本ではアジアの旧植民地など、勢力圏における布教に関する研究がかなり進んでいるが⁷⁾、ハワイ・北米についてはアメリカにおいて研究が進展している⁸⁾。これらにより、宗派的特色や僧侶派遣体制の違いといった諸点も明らかになり、「日系仏教」としては決して一枚岩ではなかつたことがうかがえる。

「開教」とは「日本仏教の御教え・教義を、まだ広まっていない地域に広げること」⁹⁾を指すといわれる。「日本仏教」という表現が示すように、布教対象はどの地域でも現地在住の日系人なので移民を追いかけただけとか、ナショナリズムと密接に結びついて政治に追随したということで、「追教」とも呼ばれていた。藤井健志氏によると、ほとんどの宗派が日清戦争における従軍布教を契機としており、日本の植民地政策と歩を一にして海外布教に乗り出したことから、政治的追随として批判的に検証されることが多いが、布教者と地域により事情が異なっているという¹⁰⁾。ハワイでも、日系仏教は日本のナショナリズムと密接に結びついていたとしばしば指摘されるが、ハワイとアジアは現地の政治情勢に違いがあり、それぞれの「ナショナリズム」との対応に違いを生んでいることも事実である¹¹⁾。

換言すれば、日系移民史が現地の在家信者の動向について、日本仏教史が移民送出側の教団や僧侶の事情について、宗教社会学が戦後を中心とする日系諸宗教についての幅広い視点を、という形でそれぞれ有益な研究成果を提供しているのである。とくに仏教史は、後述のように日系移民史に対して大きな貢献をもたらす領域であると思われる。こうした研究動向を踏まえ、本稿ではハワイの本派本願寺を中心に、他宗派についても言及し、かつアジアへの海外布教をも視野に入れて、戦前のハワイにおける日系仏教をより立体的に描くことを試みたい。

なお本稿では前山隆氏による定義にならい、「日系人」を「日本生まれ、日本国籍の移民（一般に一世と呼ぶ）および現地生まれ、現地国籍の移民の子孫」¹²⁾を含む概念で用いることしたい。また「開教」という語は、現地の僧侶も用いていたので使用するが、海外日系人向けの「布教」であったという事情を踏まえ、「海外布教」という語を併用することとした。海外へ正式派遣される僧侶は、「開教使」または「開教師」と呼ばれるので、それを踏襲した。

1. 日系移民と仏教

移民の出身地と宗教的特性—広島の場合

ハワイ移民の出身地の特色として、有元正雄氏は1885～1894年までの官約移民時代にハワイへ渡航した移民の統計から、「西日本門徒地帯の中核をなす広島・山口・熊本・福岡四県の移民」が全移民の96.2%に達していると指摘する¹³⁾。その後、1899～1923年の期間においても、移民送出県の上位4位をさきの門徒地帯が占め、総移民数に占める割合が49.5%に及んでいる¹⁴⁾。本派本願寺第2代開教監督の今村恵猛も、「当地に渡航せる同胞の多くは、広島県、山口県、熊本県、福岡県等、故国に於て真宗法義繁昌せる地方の出身者」¹⁵⁾と述べている。

ハワイへの移民をうながした要因としては、凶作による農村部の疲弊に加えて、ハワイ駐日公使のロバート・アーウィンが人口過多な西日本から労働者を募集したことがあげられる¹⁶⁾。

加えて、海苔や牡蠣の養殖が盛んであった広島湾沿岸に位置する安芸郡（現・広島市）で、1880年代に宇品港が建設されたことにともなって養殖業が衰退した。そのような地域産業の衰退も、広島湾沿岸地域から大量の移民送出をうながしたと考えられる¹⁷⁾。

他方で、宗教的エースもまた、移住型の経済活動をうながす要素として重要な役割を果たすといえる。真宗門徒の宗教的特性と移住との関わりについては、近世末期に北陸から北関東へ移住した事例が明らかにされ¹⁸⁾、行商を生業とする近江商人に関する研究も知られているが¹⁹⁾、とりわけ「真宗門徒優越地帯において、しばしば出稼ぎ・移住型経済活動が活発にみられる」²⁰⁾という。それをうながした宗教的要因として、有元氏は次の点を指摘している。

（イ）門徒の殺生忌諱、したがって墮胎・間引きの忌諱による人口増加、（ロ）門徒が勤勉・忍耐・節儉等のエースをもつこと、（ハ）門徒はまた何処に住するも弥陀の救いに変りなしとし郷里に恋着せぬこと²¹⁾

とくに（イ）と（ハ）は移民を生み出す宗教的エースとして説得力をもつが、出身地における地域産業の不振が重なれば、郷里を離れて「出稼ぎ・移住型経済活動」に赴かざるを得ない状況になったであろう。

真宗門徒が他宗派と異なり墮胎をしないことや、門松や注連飾り、神棚を飾らず、正月・盆・神祭りなど民間信仰にとって重要な年中行事をほとんど行わないために、周囲の集落から「門徒もの知らず」という世評を招いていたり、タブーを構わないということで「かんまん宗」と方言で呼ばれていることは、これまでにも民俗学、社会学、仏教史の諸領域でしばしば指摘されている²²⁾。児玉識氏によると、そのような真宗独自の宗教意識を培ったのは、近世における講、とくに門徒による「地縁的な小寄講=共同体」が大きな役割を果たしており²³⁾、今日でもそれが残存している地域が広島市郊外にあるという。小寄講は近世後期に、農村の大半を占めていた小百姓層を中心に結成された「地域的相互扶助団体である講中（同行）の全戸が加入了寄合い」で、村の有力層により構成される宮座や、本家・分家を基軸とする同族結合よりも、平等性、地縁性を重視する傾向が強い²⁴⁾。その小寄講が主催する法談では、阿弥陀仏に帰依して念佛だけを修すれば他の神仏への祈願は行わなくともよい、とする説教がなされるのであった。また阿弥陀仏の前にはすべて平等であるという思想は、ヨコの連帶を重視する講中の規約と一致するものであったという。

在家門徒が主体の地縁共同体が衰退し始めるのは、1890年代後半から1900年代にかけてだが、それは多数の若者が出稼ぎ労働者としてハワイや北米へ向かった時期と即応する。しかし在家信者が活発な宗教活動を行う真宗の宗派的特徴は、後述するようにハワイや北米において引き継がれたといえるのではないかと思われる。というのも、寺院も僧侶も限られた地域でゼロからの出発をするには、在家信者の積極的な協力がなければ難しいからである。またプランテーションは人種別に区分けされていたため、日系移民は他人種との接触が限られており、日本の共同体の特徴を比較的残しうる。出身階層として「零細な自小作および小作層」²⁵⁾が大多数であったハワイの真宗門徒が、僧侶とともに自分たちの寺院を築くとき、彼らが小寄講に代わり「仏教青年会」という形で積極的に参加したということは、本派本願寺の活発な仏教青年会を鑑

みると、十分想定できることではないかと思われる。

一方で、同じ広島県でも真宗門徒が集住しない地域がある。したがって、ハワイへ渡航した広島出身の移民には他宗派の檀家もあり、この点は、広島の仏教徒ということで多数派の本派本願寺だけを念頭におくと、見逃されてしまう。備後地方の山間部・盆地部は宗派としては「曹洞宗の卓越する地帯」²⁶⁾であり、ハワイでは観音講を中心としている²⁷⁾。広島湾沿岸の真宗門徒地帯では、先述の官約移民の時代から多数の移民を送出していたが、甲奴・神石郡は遅れて1900年代に入ってから移民送出が急増する。その背景には、この地域の主要作物であったタバコが1898年から専売化されたことに加え、政府の補償がない状況で翌年に凶作となってしまったことがある。経済的打撃を受けて、甲奴・神石郡から海外へ出稼ぎにゆく者が急増したが、それは真宗門徒地帯からの官約移民によって開拓されたルートによるもので、「順次甲奴・神石等の非真宗地帯にまで移民送出が拡大」²⁸⁾されることとなったのである。

このように、同じ県内でも宗派的分布と移民送出に至るプロセスは一様ではないが、広島県という広い地縁ネットワークによる移民の連鎖があり、それをを利用して広島湾沿岸部から県東部・山間部へも移民送出の連鎖が拡大していったことが確認された。日系仏教が移民を追いかけるという意味の「追教」という語は、揶揄として使われた面もあるけれども、その追いかかけ方の経緯についてみると、後述のように各宗派で事情が異なっているのである。

寺院設立の主体としての日系移民

日系移民が働いていた砂糖プランテーションのキャンプは全島で222あったが、そのうち80のキャンプに仏教寺院が建設されていたし²⁹⁾、キリスト教、新宗教の宗教施設も数多く設立されている。アメリカ本土でも、西海岸を中心に日系社会のあるところに寺院が建設されている³⁰⁾。さらに、極東ロシアのウラジオストックには「浦潮本願寺」³¹⁾が建設され、「満洲国」の日系宗教に関する最新の研究では、302もの神社が建設され、仏教教団では真宗大谷派、浄土真宗本願寺派、曹洞宗、浄土宗が寺院を設立したことが報告されている³²⁾。海外布教で最大規模の事業を展開した本願寺派をみても、1895～1945年の期間で、台湾64、シベリヤ4、ハワイ50、南洋15、朝鮮138、北米55、中国中南部19、満州68、中国北部29、カナダ21、樺太39の寺院を設立している³³⁾。

これら寺院の設立や開教使の派遣は、教団史を見る限り、本山主導の事業として説明される傾向がある。それは正式な布教開始を起源としたり、開教使を主体として歴史記述がなされているためだが、実際には現地日系人信者の協力によって実現した事業である。ハワイの例でいえば、1889年1月に渡布した大分県出身の本願寺派僧侶曜日蒼龍が、ハワイ初の僧侶として知られているが、そのきっかけは自坊の檀家が渡布していたため、現地の事情を聞くに及び、ハワイに渡って精神的慰安を与えようとしたからだという³⁴⁾。曜日は日系移民の多いハワイ島ヒロで布教を開始したが、彼の活動を支えたのは、移民監督官の木村斎次をはじめとする、在家の信者たちであった³⁵⁾。

だがハワイ・アメリカへの移民が急増する1890年代、本願寺派の本山はこの地域への海外布教に積極的ではなかった。むしろ、全国各地の監獄での「監獄教誨」に力を注いでおり³⁶⁾、日清戦争が勃発すると、開教使の海外派遣や寺院設立の関心はもっぱら東アジアへと向かっている。

野世英水氏によると「大規模な軍事行動が起こされた時期に、その地域において別院等の設立数が多くなっている」³⁷⁾というが、このような東アジア情勢の中、太平洋の反対側にあるハワイや北米在住の日系移民の精神的なニーズに配慮する体制が、日本側で整わなかったのも無理はないだろう。浄土宗でも、日清戦争中はハワイ布教への関心が薄れたと報告されている³⁸⁾。

ハワイの曜日は1889年10月にいったん帰国して、本山に正式な海外布教に着手するよう打診する。当時、本願寺派には「欧米仏教通信会」（のち海外宣教会）が組織されて、欧米仏教事情の報告や英文雑誌を刊行するなど海外への関心は高かったのだが、支援のとりつけに失敗する。彼はその後ハワイに戻らず、現地の日系移民からの要請は数年間保留される。そして日清戦争後に社会情勢が一段落ついた1897年、ハワイへ視察が派遣され、1898年から正式に僧侶が派遣されることとなる。また、現地の日系移民によって僧侶の布教活動が支えられるのは、アメリカ本土でも同様であった。本山から僧侶が渡米する以前からサンフランシスコ在住の日系移民による仏教徒のグループが存在し、中でも平野仁三郎は1896年に京都へ出向き、僧侶のアメリカ派遣を要請した。それを受け、本山は視察の僧侶2名を1898年に派遣し、翌年にアメリカにおける正式開教が開始したのである³⁹⁾。

したがって本願寺派の場合、非公式な形での僧侶の渡航はハワイのほうが早いが、あいだに日清戦争をはさむ形で、ほぼ同時期にハワイとアメリカへの正式開教を開始したのである。今村恵猛の述懐によれば、本山は朝鮮、中国への「大規模の開教に従事し経費多端を極め、到底布哇の開教事業を助くるに堪へず。依て開教着手の当初より夙くも独立自給の方法を講ずる」⁴⁰⁾必要があったのである。

ハワイの全宗派に共通するが、ローレン・パランボ湊石氏によると、プランテーションに建設された初期の寺院は、「プランテーション住居型寺院」というべき建築様式で、労働者用住居に日系移民の大工が内陣と外陣を設けた簡易なものであり、不明分を含む277ヶ寺のうち79ヶ寺（約35%）が該当するという⁴¹⁾。その後に登場する日本風意匠を施した「布哇折衷型」や「インド風意匠型」に比べて、建設が簡単で費用も安価であったため、本山からの資金援助がない状況で寺院を建築する現地教団にとって、この建築様式は採用しやすいものだったのであった⁴²⁾。

曹洞宗カワイロア布教場（現・ワヒアワ龍仙寺）の例を挙げると、1904年に開設され、1906年に寺院と付属日本人小学校が新築された。ワヒアワ龍仙寺住職の駒形宗彦師が保管する小学校建築記念の棟板には、「耕地会社」の「支配人グーデル殿」に請願して、「新築工事悉ク寄附セラレタリ」と全面的な協力のあったと記されている。またこの工事を手がけたのは、熊本県玉名郡の棟梁野中安次を筆頭に、熊本県飽託郡・鹿本郡・阿蘇郡、山口県大島郡、広島県甲奴郡、富山県上新川郡出身の大工9名であることも記されている。このように、文字通り在日の日系移民の手によって、ハワイに寺院が造られていったのである。

2. 日系仏教諸宗派の教団形成

ハワイにおける日系仏教諸宗派の歩みについて、ここでは教団形成の特色によってまとめてみたい。各宗派の布教開始時期を編年的に並べると、下記の通りである。

表1 日系仏教諸宗派の布教開始年

1889年	曜日蒼龍、ハワイ島へ渡る
1894年	浄土宗 (ハワイ島ハマクア)
1898年	浄土真宗本願寺派 (本派本願寺、オアフ島ホノルル・ハワイ島ヒロ)
1899年	真宗大谷派 (カウアイ島ワイメア)
1900年	日蓮宗 (ハワイ島カバパラ)
1903年	曹洞宗 (オアフ島ホノルル)
1914年	真言宗 (オアフ島ホノルル)

森田栄編『布哇日本人発展史』、常光浩然『日本佛教渡米史』より作成

本稿は社会学的な類型化を目指すものではないけれども、教団形成においては大きく分けて次の4つの特徴があげられると思われる。1) 出身地の地縁ネットワークを利用するケース、2) 僧侶の發意による布教開始のケース、3) 他宗派との競合関係がみられるケース、4) 在家信者の講が主要な役割をもつケースである。これらは厳密に区分されるものではなく、宗派によっては重複する場合がある。

出身地の地縁ネットワークを利用するケース

ハワイに渡った僧侶が、所属宗派の同じ在家信者に寺院設立を呼びかけることは、全宗派に共通することである。前述のように、曜日蒼龍は自坊の檀家を通じてハワイに渡っている。大分出身者はハワイ日系社会では少数派だが、既にみたように広島出身者の多くが真宗門徒であることから、彼らが本派本願寺のメンバーとなっている。後述するが、東本願寺はカウアイ島からスタートして、熊本県出身の開教使が広島や山口出身の真宗門徒から支援を得て布教活動を行っている⁴³⁾。

浄土宗の場合、山口県大島郡にある西蓮寺住職の岡部学応が最初期に赴任したことにより、大島郡出身の檀信徒を中心とする協力者が集まつた⁴⁴⁾。山口県内で最多の移民送出地域として知られる周防大島の宗教分布は、島全体で浄土宗50%，真宗40%，その他10%の比率といわれ、「島内には、真言宗から改宗したと言われる寺院が多く、弘法大師伝説をもった旧跡も各地に存在していて現在も八十八ヶ所靈場巡りの参詣者で賑っている」⁴⁵⁾という。大島で大師信仰が盛んであることは、他方で真言宗との関係も作っており、ハワイでは「中核的メンバーには、山口県大島出身者の系統が目立つ」⁴⁶⁾という。

したがって周防大島は、宗派色の強い真宗でも、他宗派の信仰が複雑に入り組んだ地域なのである。竹田聰州氏によると、真宗は教義的に独自性が強い宗派だが、「民間信仰の影響濃い他宗の信徒に囲まれた中に点在し、周囲に対し信仰的にやや劣勢にある場合」と「真宗地帯と呼ばれる地方などの一村全戸ほとんどが門徒というような土地」では事情が異なる⁴⁷⁾。これに関連して、浄土宗と真言宗の盛んな大島では、とくに1889年に大島八十八ヶ所靈場が開設されてから、真言宗の影響を受けて「真宗門徒も次第にこれに同化されていった」⁴⁸⁾という。

曹洞宗の場合は、広島県内でも主に備後地方の寺院の開教師が多く、檀家のハワイ渡航に伴

って渡布する形でスタートしている。神石郡龍雲寺の河原仙英が本山の命でハワイに最初に着任し、ハワイ在住の龍雲寺檀家の支援で布教場を設立している。ハワイ仮別院の建設にあたって、豊田郡出身の在家信者である光永良吾が基金募集の労を執ったが、山口県都濃郡出身の磯部峰仙が仮別院に着任した後、同県出身の開教師が着任するようになった⁴⁹⁾。

同様に、広島出身の開教使が多い本派本願寺でも、福井出身の開教使がもう一つの勢力となっている。初代開教監督の里見法爾と2代監督の今村がいずれも福井出身で、「寺族」の関係にあったことに加え、今村が同郷の僧侶を招聘したためである⁵⁰⁾。このように、僧侶もまた地縁ネットワークの連鎖によって派遣されていたのである。

僧侶の発意による布教開始のケース

浄土宗で周防大島の地縁ネットワークの他に、僧侶に海外布教への動機付けを与えたのは、「布咲宣教会」である。これは宗内の有志による組織だが、もとは先述の海外宣教会に端を発する。海外宣教会は超宗派の組織だったため、浄土宗関係者も参加していたが、曜日のハワイ布教が頓挫した後、浄土宗の有志がハワイ布教へ向けて寄付を呼びかけ、1897年までに416円6厘を集めている⁵¹⁾。このように、組織的にハワイ開教を実施できる体制を最初に整えたのは、浄土宗であった。

日蓮宗は、奈良県蓮長寺の高木行運がハワイ移民の窮状を聞くに及んで渡航したことがきっかけである。1929年の統計であるが、奈良県出身者は移民送出数が最小であるから⁵²⁾、高木は地縁ネットワークではなく、現地で日蓮宗信徒を見いだす形でスタートしたのである。安中尚史によると、高木は本山からの財政支援もないまま50ドルの手持ち金をもって渡航し、ハワイ島カウ地区パハラ（カパパラ）で最初の信者を見いだして布教を続けた⁵³⁾。その高木に転機が訪れたのは、加藤清正を祀るホノルルの加藤神社の宮司が高木へ協力を求めたときで⁵⁴⁾、これによりホノルルに日蓮宗が進出することとなったのである。加藤清正が肥後藩主となつたことから、熊本県には清正公信仰をもつ人が多いが、その熊本は広島、山口、沖縄と並んで移民出身地の上位を占めている。日蓮宗でも清正公は盛んに祀られていたことから、熊本県人の清正公信仰を契機として、信者を増やすことができたのである。

本願寺派の曜日と同様、日蓮宗の高木によるハワイ布教は、ある意味では無謀といえる面がある。しかし曜日も高木も、本山からの財政支援はなくとも、現地の在家信者からの寄進のみで布教を行ったという点では共通している。真宗と日蓮宗という宗派色の強い教義をもつ2派の僧侶が、組織的な後ろ盾もなく海外へ布教に赴き、最終的には本山にハワイ開教を開始させるに至ったことは特筆すべきと思われる。

他宗派との競合関係がみられるケース

真宗大谷派は、日本では本願寺派とほぼ同規模の教団であり、西日本と九州に主な教勢をもつ本願寺派に対して、主として北陸、上越、東海地方に教勢をもっている。阿満道尋氏によると、カウアイ島にワイメア東本願寺を設立して草創期を築いた2名の開教使が帰国した後、熊本県出身の開教使が布教活動を引き継いでいる⁵⁵⁾。真宗大谷派はすでに1870年代から東アジア布教に着手したが⁵⁶⁾、ハワイでは本願寺に水をあけられていた。遅れてのスタートを切っ

たハワイの東本願寺としては、本派本願寺がまだ教勢を延ばしていなかったカウアイ島から布教に着手するのが妥当な策であったろう。だがハワイの東本願寺と本派本願寺は、反目していたわけではない。勢力が強い本派本願寺の今村恵猛が超宗派的志向をもっていたことそこに加え、広島の本願寺派の寺院に生まれて大谷派の寺院へ養子に入った泉原寛海のような開教使がいたことも、両者の関係を比較的良好にしたという。カリフォルニア州で東西本願寺系の2派が、日系社会を二分する対立を招いてしまったことと比べると、対照的であった⁵⁷⁾。

在家信者の講が主要な役割をもつケース

曹洞宗のハワイでの発展には、開教師の努力もさることながら、觀音講の果たした役割が大きい。カウアイ布教場（のちカウアイ禪宗寺）で1905年に組織されたのを嚆矢として、各地のプランテーション寺院11ヶ寺のうち9ヶ寺に組織された。只管打坐を唱えた宗祖道元の教えとは直接関わらないが、曹洞宗では地蔵や觀音を信仰の対象として取り入れている。觀音が選ばれたのは、死者供養に関わる地蔵ではなく、現世利益をもつ觀音信仰が労働者の求める宗教の形であったことによるという⁵⁸⁾。

真言宗は、「他宗と違い開教師によつて開かれたものでなく、宗祖大師を信仰する在留同胞によつて開かれた」⁵⁹⁾のであり、まず移民によって組織された大師講から発展し、その後で真言宗の教団が僧侶を派遣したのが特徴で、先述のように周防大島出身者が中心となっている。大師講は在家信者の宗教組織であり、真言宗の教義や儀礼の専門知識を身につけていたわけではないが、その中のリーダー的人物が「一種のカリスマ性を發揮し、祈祷行為を行うように」⁶⁰⁾なり、主に病氣直しを行つた。この俗人リーダーたちは広範囲にわたって信奉者を集めめたが、それが日系社会において「淫祠邪教」として問題視されてしまった。そこへ1902年ごろハワイへ移民として渡った湯尻法眼が、ハワイの大師講の状況を憂慮して、俗人リーダーを真言宗醍醐派の僧侶として得度させたり、本山に働きかけて僧侶の正式派遣を要請した。これを受けて、1914年に関栄覚が着任するに至っている⁶¹⁾。ハワイの真言宗＝大師信仰の特徴として、星野英紀氏は「きわめて民衆的色彩の強いもの」であり「真言密教を確立した弘法大師空海ではなく、名もない市井の庶民のさまざまな願いをかなえてくれる『お大師さん』だった」⁶²⁾こと、「宗教活動の中心はいまも加持祈祷であつて、葬祭は大きな部分を占めていない」こと、「祈祷を中心としているため、信者と寺の結びつきは開教師の個人的資質がキーポイントになるケースがおおい」ことなどをあげている⁶³⁾。曹洞宗の觀音講と同様、大師講は真言宗の教義とは直接関係のない組織だけれども、在家信者の宗教的ニーズという点から、こんにちでも不可欠な要素なのである。

大師講が「淫祠邪教」と呼ばれてしまったことに関連して、島田法子氏は、本派本願寺関係者が「日本から入ってきた民族宗教—『稻荷、弘法大師、卜者占婦、大和神社、祇園神社』—を迷信であるとして、それらをハワイから排除すべきであると主張」⁶⁴⁾していたことを指摘する。加持祈祷などを「雑修」として行わない、神棚を置かない、方角や暦などのタブーをもたないといった真宗門徒独自の生活様式からすれば、それは当然起きた反応であろう。同県意識が差別意識につながったという指摘もあるが⁶⁵⁾、すでにみてきたように県単位で複雑な宗教分布がみられることから、むしろ真宗の宗派的特徴が大きく関連していたのではないかと思

われる。

3. 日系仏教とプランテーション労働者

ここでは本派本願寺を中心に、日系仏教とプランテーション労働者の関係について、考察してみたい。各宗派に共通することとして、布教開始のころ、移民労働者の生活環境は荒廃し、僧侶への不信感は強く、道徳的に退廃した状況であった。僧侶たちは劣悪で絶望的な環境で働く労働者に対して精神的慰安を与え、倫理的な生活改善を勧める説教をしたというが、本派本願寺の今村恵猛は、次のように労働者へ真宗教義の平等性を説いたと述べている。

我真宗は天台真言等の貴族的仏教、浄土禪等の武士的仏教の後に出て、平民を対象とする平民教なり。（中略）資本家尊ぶべからざるに非ずと雖、労働者最も愛すべく、外人敬す可らざるに非ずと雖、同胞最も親むべく、移民会社、日本官憲等の嘲りて田舎者視したる耕地労働者は、實に弥陀救済の主賓たり正客たるものなり⁶⁶⁾

他宗以上に「平等、勤勉、連帶、質素、正直、忍耐といった通俗道徳」を実践する門徒たちの倫理意識は、武士道ではなく、共同体での信仰生活の中で培われていったのであり、「真宗信仰に基づいて自己規律としての倫理＝通俗道徳を身につけていった」といわれる⁶⁷⁾。ハワイにおいても、平等主義に立った説教によって開教使は労働者の信頼を集めようになり、1904年にワイパフでストライキが起こった際、今村が職場に戻るよう説得したところ、労働者は職場に戻った。これを機に、経営者側が労資協調を維持するため、仏教寺院建設を援助するようになったことはよく知られている⁶⁸⁾。

だがプランテーションのストライキはその後も頻発し、労働者＝在家信者の布施に依存する仏教寺院は、労資協調路線と平等主義の教義との矛盾に挟まれるようになる。1908年12月8日付『日布時事』記事で、今村は労働者の生活がいまや定住型へ移行し、生活水準も向上していることを認めている⁶⁹⁾。そして1909年には、オアフ島内の各プランテーションで労働組合が組織され、大規模なストライキが起こった。その際結成された増給期成会が作成したパンフレットには、アメリカの伝道本部から財政支援を受けられるキリスト教会と違い、仏教寺院はすべて仏教徒の労働者の布施によって運営されているとあり、彼らが自らの自由な宗教活動を行うためにも増給要求のストを行っていたことが記されている。それでも今村はオアフ島ストライキの調停役を引き受け、労働者の多くがいったんは復帰したが、注目すべきは、彼らが再びストライキに戻ったことである⁷⁰⁾。今村自身が認めるように、日系労働者がハワイ定住を決めた以上、増給要求は必然的に生じる。このストライキ介入失敗こそが、本派本願寺がその労資協調路線を見直すきっかけになったといっても過言ではないだろう。

じじつ、1919年10月19日に布畦島聯合青年会が増給要求を発表した後、ワイアルア仏教青年会は増給要求を掲げ、10月25日付で全島青年大会を開催する提議をした⁷¹⁾。1920年初頭の大規模な第二次オアフ島ストライキに際して、今村は1920年元旦の『布畦報知』紙上でスト支持を表明し⁷²⁾、仏教各宗派と神道の宗教家は、1月23日付で耕主組合に対して連名で意見書を提出

して、増給要求に応じるよう忠告した⁷³⁾。1920年8月4～7日に行われた開教使会議では、今村は開教使に社会問題に目を向けるよう忠告して「聯盟の破壊は不可」と述べる一方、ストに介入して信徒総代から弾劾されたカフク駐在の開教使をホノルルに引き取って、今村自身が指導にあたっている⁷⁴⁾。

ハワイの主要産業である砂糖プランテーションで、仏教青年会が増給運動の牽引役として活動していた1919年は、折しも合衆国連邦教育局の教育調査団による日本語学校調査が行われており、さらに日系仏教徒は「非アメリカ的」な教育を施すとして、100%のアメリカ化を目指す諸団体から批判されていた時期でもあった⁷⁵⁾。教育調査団については沖田行司氏、安里のり子氏の詳細な研究に譲るが⁷⁶⁾、報告書の内容は日系二世が通う日本語学校の取締まりを示唆するものであった。本派本願寺とその付属学校は、1910年代半ばから「米化」へ向けて組織的な改革を進めていたが⁷⁷⁾、教育調査報告書は仏教系日本語学校では「非アメリカ的」な教育を行っていると結論づけたのだった⁷⁸⁾。そこに、「『教育問題』としてではなく『政治問題』として」⁷⁹⁾日本語学校問題を扱おうとする、連邦教育局・ハワイ教育局の戦略を読み取ることもできるだろう。そして仏教、神道の宗教家が1920年初頭の大規模ストライキを支持したことは、日本語学校と日系宗教に対して「反アメリカ的」という強烈なイメージをアメリカ社会に植えつけ、やがて本土の西海岸における排日運動を激化させる根拠となって、飛び火していったといえるだろう⁸⁰⁾。

おわりに

ハワイで教団が形成された草創期において、諸宗派は移民の出身地の宗派的分布に基づいて教勢を広げていった。開教使は在家信者である日系移民が求めたように、日本で彼らが親しんでいた説教や宗教的儀式を執り行い、そのため1910年代後半ごろには「非アメリカ的」と批判されることにもなった。だが100%のアメリカ化でなくとも、日系仏教徒は自らの生活向上のために権利行使を行い、1920年にはジョージ・ワシントンの肖像を掲げてストに臨んだのである⁸¹⁾。同時代の日本では労働運動に協力的な仏教教団は皆無であったが、ハワイで対照的な対応を生んだのは、本派本願寺の場合、教義のどの点に由来するのだろうか。

念仏以外の行を「雑修」として斥けることは、真宗門徒の結束を強めるという点で有効であり、信仰を世俗の法よりも重要と説くことは、為政者の弾圧に耐えてきた歴史が示すように、真宗の特徴である。アメリカニゼーション運動に際して、今村恵猛は宗教の自由や仏教的民主主義を論じて、批判に応えているが⁸²⁾、すでに1910年代前半、日系社会から批判を受けても本派本願寺付属の日本語学校は宗教教育を続けていたし⁸³⁾、将来的にミッションスクールを設立してハワイ生まれの開教使を養成する構想をもっていた。それは今村が開教監督として30年以上上教團を率いたという、他宗にはない事情もあるが、本派本願寺のアメリカ化をうながした真宗思想も要因と考えられる⁸⁴⁾。

日本とは異なるハワイという異文化の地で、人種差別と過酷な労働条件の中で、日系移民は自分たちの暮らしを支える価値観、生き方の根拠となる指針を仏教に求めていた。その宗教的要求がハワイ各地に多数の仏教寺院を建設させたのであり、仏教青年会はハワイの労働運動を支

えるようになり、開教使もそれを支持するべく方向転換を余儀なくされた。スト破りの開教使を弾劾するほどの発言力を在家信者がもっていたことは、平等主義の教義からすれば当然の動きといえるが、教団の労働運動への対応を変える勢いであったことは注目される。このことは、ハワイ日系社会において仏教の果たした役割が狭い意味での「宗教」的領域にとどまらなかつたことを示している。

そして1920年の大ストライキ以降、日系移民が都市部へ移住を始め、アメリカ市民である二世が日系社会の担い手となるべく社会進出するにしたがって、プランテーション寺院中心の日系仏教は新たな局面を迎える。本稿では紙数の関係で一世を中心に論じたが、ハワイ独自の「日系ハワイ仏教」というべき、文化変容を経た独自の仏教の誕生は、一世仏教徒の時代にもその可能性はあったけれども、二世仏教徒の増加は必然的にその文化変容をさらにうながしていくのである。他宗派の1920年代以降の動向とともに、稿を改めて論じることとしたい。

付記

本稿は、2007年度阪南大学産業経済研究所助成研究（C）による史料調査の研究成果である。ハワイでの調査にあたっては、数多くの方々にお世話になった。紙数の関係でお名前をあげないが、暖かいご厚意に心から感謝を申し上げる。

注

- 1) 同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』、PMC出版、1991、1-910頁。
- 2) ①Louise H. Hunter, *Buddhism in Hawaii: Its Impact on a Yankee Community*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1971, pp. 1-266; ②Eileen H. Tamura, *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity: The Nisei Generation in Hawaii*. Urbana: University of Illinois Press, 1994, pp. 1-326; ③Paul David Numrich, "Local Inter-Buddhist Associations in North America," in *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*. Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen, eds. Richmond, Surrey: Curzon, 1999, pp. 117-142; ④George J. Tanabe, "Grafting Identity: The Hawaiian Branches of the Bodhi Tree," in *Buddhist Missionaries in the Era of Globalization*. Linda Learman, ed. Honolulu: University of Hawaii Press, 2005, pp. 77-100; ⑤Noriko Asato, *Teaching Mikadoism: The Attack on Japanese Language Schools in Hawaii, California, and Washington, 1919-1927*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2006, pp. 1-176.
- 3) ①沖田行司『ハワイ日系移民の教育史—日米文化、その出会いと相剋』、ミネルヴァ書房、1997、1-260頁; ②島田法子「20世紀初頭のハワイにおける仏教開教と文化変容—『同胞』に見られるアイデンティティの変化を中心に」、戸上宗賢編『交錯する国家・民族・宗教—移民の社会適応』、不二出版、2001、179-211頁。
- 4) 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教—ハワイ日系人宗教調査報告書』、東京大学宗教学研究室、1981、1-236頁; Keiichi Yanagawa, ed., *Japanese Religions in California: A Report on Research within and without the Japanese-American Community*. Tokyo: Department of Religious Studies, University of Tokyo, 1983, 1-291頁。
- 5) ①加登田哲英『布哇真言宗開教沿革—創立五十周年記念』、真言宗布哇別院、1966年、1-19頁; ②曹洞宗ハワイ開教総監部編『曹洞宗ハワイ開教七十五年史』、ハワイ曹洞宗協会、1978、1-308頁; ③ハワイ日蓮宗別院『ハワイ日蓮宗80年のあゆみ』、ハワイ日蓮宗別院、1982年、1-64頁; ④新保義道『ハワイ開教九十年史』山喜房仏書林、1987年、1-548頁; ⑤Ruth M. Tabrah, "A Grateful Past, A Promising Future," in *A Grateful Past, Promising Future: Honpa Hongwanji Mission of Hawaii 100 Year History, 1889-*

1989. Honpa Hongwanji Mission of Hawaii, ed. Honolulu: Centennial Publication Committee, Honpa Hongwanji Mission, 1989, pp. 1-120; ⑥Hawaii Soto Mission Bishop's Office, ed. *History of the Soto Sect in Hawaii*. Honolulu: Hawaii Soto Mission Bishop's Office, 2002, pp. 1-238.
- 6) ①井上順孝『海を渡った日本宗教—移民社会の内と外』, 弘文堂, 1985, 1-224頁; ②中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究—日本・アメリカ・ブラジル』, 刀水書房, 1989, 1-526頁。
- 7) 藤井健志「戦前における仏教の東アジア布教—研究史の再検討」, 近代仏教6, 1999, 8-32頁。
- 8) Duncan Ryūken Williams, comp. "Dissertations and Thesis on American Buddhism," "North American Dissertations and Theses on Topics Related to Buddhism," in *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*. Duncan Ryūken Williams and Christopher S. Queen, eds. Richmond, Surrey: Curzon, 1999, pp. 262-266; 267-311. ダンカン・ウィリアムス氏がハーバード大学の「多文化主義プロジェクト」(Pluralism Project)において、日系以外も含めたアジア系アメリカ仏教に関する網羅的な研究論文リストをまとめている。次のURLを参照されたい http://www.pluralism.org/resources/biblio/as-am_buddhism.php (2007年12月21日現在)。
- 9) 小島勝「序章 海外開教と教育事業」小島勝・木場明志編著『アジアの開教と教育』, 法藏館, 1992, 7頁。
- 10) 前掲7), 11-22頁。
- 11) 守屋友江『アメリカ仏教の誕生—20世紀初頭ハワイにおける日系宗教の文化変容』, 現代史料出版, 2001, 1-60頁。
- 12) 前山隆『異文化接触とアイデンティティ』, 御茶の水書房, 2001, i頁。
- 13) 有元正雄『真宗の宗教社会史』, 吉川弘文館, 1995, 377頁。
- 14) 前掲13), 378頁。
- 15) 今村恵猛『ハワイ開教史』, 本派本願寺布哇開教教務所文書部, 1918, 27頁。
- 16) 前掲2) -②, 10頁。
- 17) 飯田耕二郎「昭和初期・広島市内の日系二世の分布について」, マイグレーション研究会第14回例会, 2007年12月1日。
- 18) 五来重「北陸門徒の関東移民」, 史林33, 1950, 597-612頁。
- 19) 内藤莞爾「宗教と経済倫理—浄土真宗と近江商人」, 日本社会学会編『社会学』8, 岩波書店, 1941, 243-286頁。
- 20) 前掲13), 381頁。
- 21) 前掲13), 381頁。
- 22) ①竹田聰州「民間信仰と真宗」, 赤松俊秀・笠原一男編『真宗史概説』, 平楽寺書店, 1963, 383-389頁; ②ロバート・N・ベラー『日本近代化と宗教倫理—日本近世宗教論』(堀一郎・池田昭訳)未来社, 1966, 1-354頁; ③児玉識「周防大島の「かんまん宗」(=真宗)とその系譜」, 河合正治編『瀬戸内海地域の宗教と文化』, 雄山閣出版, 1976, 141-169頁。
- 23) 児玉識「近世真宗の社会的実践—僧叡(石泉)学派を中心に」, 真宗教学研究28, 2007, 3頁。
- 24) 児玉識『近世真宗と地域社会』, 法藏館, 2005, 204頁。
- 25) 前掲13), 383頁。
- 26) 前掲13), 381頁。
- 27) 前掲5) -⑥, 25-27頁。
- 28) 前掲13), 383頁。
- 29) パランボ湊石ローレン麗子「ハワイにおける「プランテーション住居型」寺院建築の研究—ハワイの日系人社会における寺院建築の変容過程に関する研究(1)」, 日本建築学会計画系論文集513, 1998, 283頁。

- 30) Tetsuden Kashima. *Buddhism in America: The Social Organization of an Ethnic Religious Institution.* Westport, CT: Greenwood Press, 1977, pp. 225-227.
- 31) 松本郁子『太田覚眠と日露交流—ロシアに道を求める仏教者』, ミネルヴァ書房, 2006, ii頁。
- 32) 木場明志・程舒偉編『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』, 柏書房, 2007, 452-504頁。
- 33) 前掲 9), 15 頁。
- 34) 西光寺住職・東陽円龍氏の談, 筆者によるインタビュー, 1996年 8月 24 日。
- 35) 前掲 5) -⑤, 1-8 頁。
- 36) 本願寺史料研究所編『本願寺史』第 3 卷, 浄土真宗本願寺派宗務所, 1969, 370-384 頁。
- 37) 野世英水「共同研究 戦前の中国における浄土真宗の開教と日本人子弟教育—青島と大連を中心に」, 龍谷大学仏教文化研究所紀要 40, 2001, 53 頁。
- 38) 浄土宗海外開教のあゆみ編集委員会編『浄土宗海外開教のあゆみ』, 浄土宗開教振興協会, 1991, 30 頁。
- 39) Buddhist Churches of America, *Buddhist Churches of America. Vol. 1 75 Year History, 1899-1974.* Chicago: Nobart, 1974, pp. 44-47.
- 40) 前掲 15), 28-29 頁。
- 41) 前掲 29), 281-283 頁。
- 42) 前掲 29), 279 頁。
- 43) Michihiro Ama, "Immigrants to the Pure Land: The Acculturation of Shin Buddhism in Hawaii and North America, 1898-1941." Ph. D. dissertation, University of California, Irvine, 2007, pp. 1-367.
- 44) 前掲 5) -④, 103 頁。浄土宗でハワイへ最初に赴任したのは松尾諦定だが, 移民の少ない長野県出身であったため, 全く知人のない環境での布教活動であった。
- 45) 前掲 22) -③, 145-146 頁。
- 46) 星野英紀「ハワイ日系人と大師信仰」, 宗教研究 246, 1983, 65 頁。
- 47) 前掲 22) -①, 384 頁。
- 48) 前掲 22) -③, 146 頁。
- 49) 森田栄編『布哇日本人発展史』, 真栄館, 1915, 350-357 頁。
- 50) 前掲 11), 101 頁。
- 51) 前掲 38), 22-31 頁。
- 52) 飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地理』, ナカニシヤ出版, 2003, 35 頁。
- 53) 安中尚史「ハワイにおける日蓮宗の開教活動について」, 印度学仏教学研究 52-2, 2005, 78-83 頁。
- 54) 結局, 加藤神社との協力は断ったが, 明治初年の神仏分離令とそれに続く廢仏毀釈という歴史を考えると, 遠く国境を越えたハワイで明治政府の宗教政策と相反する神仏合同が企図されたということである, 興味深い事例である。
- 55) 前掲 43), pp. 315-317.
- 56) 柏原祐泉「解説」, 柏原祐泉編『真宗史料集成』, 第 11 卷, 同朋舎, 1975, 28-32 頁。
- 57) 前掲 43), pp. 286-314.
- 58) 前掲 5) -⑥; Yoshifusa Senryo Asai, "Sotoshu in Hawaii in the Early Twentieth Century." Paper presented at the Issei Buddhism Conference at the University of California, Irvine, September 3, 2004.
- 59) 前掲 5) -①, 6 頁。
- 60) 前掲 46), 66 頁。
- 61) 前掲 5) -①, 6-7 頁。
- 62) 星野英紀「ハワイにおける大師信仰の展開と真言宗寺院の活動」, 柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教—ハワイ日系人宗教調査報告書』, 東京大学宗教学研究室, 1981, 142 頁。

- 63) 前掲46), 66頁。
- 64) 前掲3) -②, 191頁。
- 65) 前掲6) -①。
- 66) 前掲15), 25-26頁。
- 67) 前掲23), 3-5頁。
- 68) ロナルド・タカキ『パウ・ハナ—ハワイ移民の社会史』(富田虎夫・白井洋子訳), 白水書房, 1986, 160-162頁。
- 69) 1908年12月8日付『日布時事』。
- 70) 前掲11), 105頁。
- 71) ①堤隆編『布哇労働運動史』, 布哇労働聯盟会本部, 1921, 68-78頁; ②Gary Y. Okihiro, *Cane Fires: The Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945*. Philadelphia: Temple University Press, 1991, p. 67.
- 72) 1920年1月1日付『布哇報知』。
- 73) 前掲70) -①, 244-247頁。
- 74) 前掲11), 119頁。
- 75) 前掲2) -②, pp. 203-206.
- 76) 前掲3) -①; 前掲2) -⑤。
- 77) 前掲11), 101-229頁。
- 78) 前掲2) -⑤, pp. 21-41.
- 79) 前掲3) -①, 225頁。
- 80) 前掲2) -⑤, pp. 1-116.
- 81) 前掲70) -①の巻頭にある写真に, デモ行進後の演説会場にワシントンの絵が置かれている様子が写っている。
- 82) 前掲11), 117-118, 174-217頁。
- 83) 前掲3) -①, 112-131頁。
- 84) 守屋友江「二〇世紀初頭ハワイにおける国際派仏教徒たち—角田柳作と今村恵猛を中心に」, 近代仏教7, 2000, 70-90頁。